

【特色あるフロンティアスクールの取組事例】

都道府県番号	39
都道府県名	高知県

()
 該当する観点にチェックをすること

・学校名及び規模

梶原町立梶原小学校										
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数	
学級数	1	1	1	1	1	1	2	8	11	
児童数	20	19	25	17	18	14	3	116		

・実践研究の概要

<p>・主題（テーマ）</p> <p> 基盤学力の徹底と基礎学力の充実</p> <p> - ワクワドキドキ大好き勉強 -</p> <p>・テーマ設定の趣旨</p> <p> 本校では、児童の様々な学習課題を解決するために平成13年度より6年計画で「梶小教育改革」をスタートさせた。そして初年度の平成13年度は、基礎学力の基礎（基盤学力）をなすものとして計算・漢字・読書・作文等を位置付けて、これらの習熟に集中的に取り組んだ。この取り組みにより、学習規律が成立し、落ち着いた雰囲気の中で授業に集中する。計算力・漢字力・読書力等の伸び。授業終始の時刻遵守等、学校生活のリズムの確立等の成果がみられた。</p> <p> この成果の上に立って、第2年次の本年度は、基礎学力の取り組みの発展的継続と、一人1教科研究という形で教師の授業力向上を図る取り組みにより、児童の学びの姿勢をより意欲的なものにし、基礎学力の充実を目指すこととした。</p>
--

・実践研究の内容について

() 研究体制の工夫

平成13年度の集約段階での議論に時間を割いて、14年度の研究の方向付けを明確なものにした。このことにより、前年度の成果と課題をふまえて共通理解を図った上で本年度の実践をスタートさせた。

基盤学力部会・基礎学力部会・幼小連携教育部会の3部会を設置した。

部会で、研究推進計画案作成 全体会で検討 部会で研究推進計画作成 全体におろす 実践 実践報告会 部会で推進計画の手直し 全体におろす、という流れで、実践を確かめ合いながら軌道修正をしていった。

評価規準の指導案への組み込みのために、指導案形式について何度も検討会を行った。また、新しい評価については、各教科の講師を招聘するたびに講話内容にとりあげていただき、共通理解を図るようにした。

() 実践研究の内容

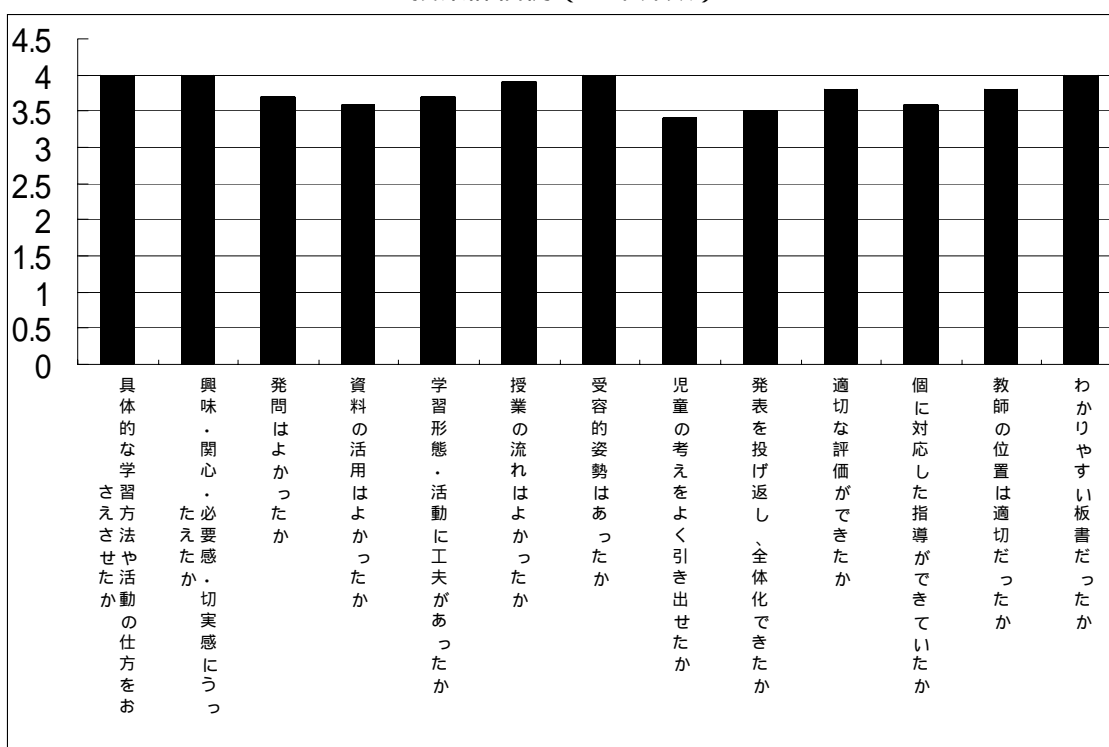
授業改善のためには、授業を厳しく見つめ直すとともに、その授業分析をもとにして、より精密な指導計画を作成する努力が必要である。そこで本校では、教師の授業力向上を目指し、授業の事後評価に力点を置いて授業改善に努めることとした。

授業の評価にあたっては、他者評価・自己評価・児童評価という三つの視点からの評価を基礎資料として授業分析を行い、次回からの指導に生かすようにした。

他者評価

授業を成立させる要件として教師の活動を13項目、児童の活動を9項目取り上げて授業評価表を作成し、公開授業後に参観者から各項目について4段階評価をしてもらい、その結果を集計しグラフ化して授業分析資料とした。

授業評価例（5年算数）



授業者の反省

「児童の考えをよく引き出せたか」と「発表を投げ返し全体化できたか」の項目の評価が低い。これは、教師主導の傾向があることの現れであると思われる。

今後は、この点に配慮した授業の組み立てを考えていきたい。

自己評価

授業を自己評価するために、評価規準を明記した指導案を作成した。児童の関心・意欲・態度、知識・理解等の達成の状況を、授業中あるいは授業後に把握するために、指導過程のどこで、何について、どのような方法で評価するのかを指導案に書き込んだ。そして、この評価計画案に基づいて児童個々の達成状況を評価するとともに、授業の自己評価資料とした。

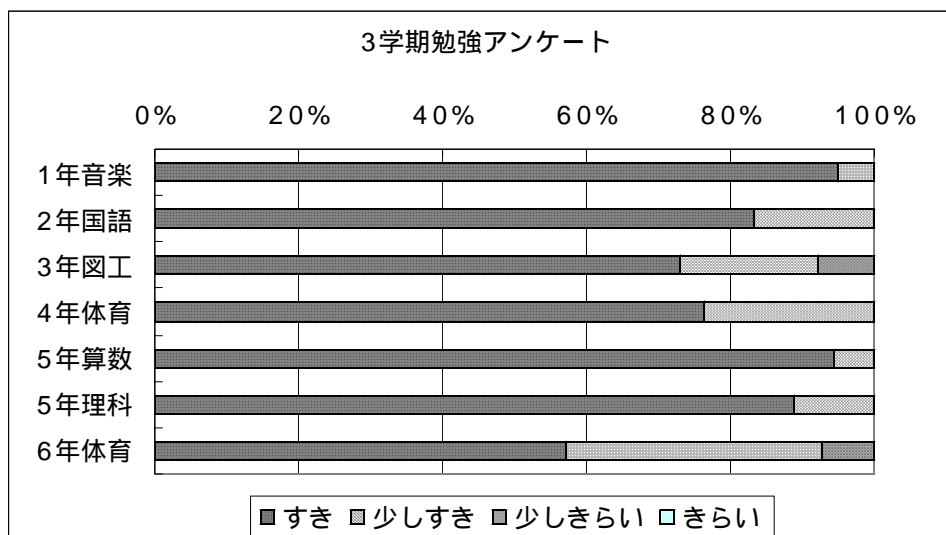
児童評価

児童の授業に対する興味・関心・意欲等についての意識を把握するため、児童自身に授業をどう感じたかについて記述してもらい授業評価表を作成した。授業後に4段階評価をしてもらい、評価結果をグラフ化して授業分析資料とした。また、児童には、授業後に学習日記を書いてもらい、個々の児童の関心・意欲・態度、思考、知識・理解等についての評価資料とするとともに、教師の自己評価資料にした。

() 成果と課題

成果

一人年間3回の研究授業を実施し、その度に他者評価・自己評価・児童評価という三つの視点からの授業分析をすることで、教師の指導の改善点が明確になり、より精密な指導案作成ができてきた。このことにより、児童の学習意欲を刺激する授業が多くなってきた。



上のグラフは、3学期はじめに、一人1教科研究の教科について児童の意識調査をしたものである。これによると、好き、少し好きというプラス評価をした児童が5教科で100%に達している。この教科についての意識調査からも、授業評価に基づいた指導法の改善はある程度の成果を上げたと言えるのではないだろうか。

課題

評価規準の関心・意欲・態度・思考等について授業中に評価記録をとることを、指導者自身も参観者も評価カードを作成して実施したが、評価に困難さを感じるが多かった。今後は、授業中の評価方法について研究を深め、簡便で効率的な評価方法を生み出していくことが重要である。

() 成果の普及方策

年間3回の研究授業のうち、2回については校外にも案内を出して、実践成果を伝えるとともに、さらなる改善についての提言をいただくこととしている。

ホームページに研究の概要を掲載する。

研究集録を作成し公表する。

県主催の連絡協議会等で実践の成果を発表する。